戦火をくぐった写真帳から

井出和夫
中野一丁目

染みのついた布装丁の写真帳を開くと、お宮参り、藤で編んだ乳母車の中での泣き顔、真新しい下駄をひもで足にしばりつけて得意気な顔、従兄と城山公園でのボール遊び、大きな五月人形の前で御機嫌な顔、玄関先で新聞紙のカブトをかぶり木刀を腰にすまし顔、ラッパと機関銃をもって兵隊さん、正月飾りの玄関先で祖父母、伯父伯母、従兄弟と一緒の晴姿など。

茶色に変色した写真一枚一枚に、四歳頃までのことが、父や亡き母、祖父母から聞かされた話とともに思い出されます。

私の家は、現在の中野一丁目六一番あたりにありました。第二次世界大戦が始まった年に、助産婦の伯母の手で私は産声をあげました。町内には両親の親類も住んでいましたし、父は、銀座・新宿の洋服生地店に番頭として勤めており、経済的にも精神的にも恵まれた環境の中にいたようです。

しかし、そんな平和な日はわずかで、日に日に戦況は悪化しており、やがては本土決戦という状況になったのでしょう。昼間は竹槍訓練、防火訓練が行われ、夜は外に灯がもれないよう電燈に覆いをし、防空頭巾と非常用布袋を枕元に置いて寝るという生活になりました。

夜になると米機が飛来するようになり、その都度、空襲警報のサイレンが鳴ります。母は戸締りをし、火を消し、電燈を消しと家中をかけまわり、私に防空頭巾を被せ、「早く、早く」と私をせきたてて表へ飛び出します。外は防空壕へ急ぐ人、消火活動のために所定の場所へと急ぐ人で誰もが駆け足です。母に手を引かれ、時には背負われて道端に掘られた防空壕へと避難します。闇の天空からヒュル、ヒュル、ヒュウと、ひっきりなしに焼夷弾が降ってきて、家屋が町が炎上しているのが見えます。また、地上からは襲来する米機を探すサーチライトの光が幾条も交差し、高射砲を撃つ音が聞えます。

私は寒さと怖さから震えながら、しかし、人ごとのように眺めていたのを覚えています。米機が去って、炎が赤々と夜空を焦がす中で警戒警報解除のサイレンが鳴ると、防空壕のあちこちから安堵の声が聞こえ、道行く人の足音も落着きます。その

時「さぁ、お家へ帰ろうね。今日も無事でよかったね」という母の声を聞いたような気がします。

一晩に一回だった米機の襲来は、一晩に数回になり、やがて昼間にとエスカレートして、東京大空襲へと向かったのです。

昭和十九年、中野は、下町での空襲被害の経験からか、町の延焼を食い止めるため、家屋を一定の幅で撤去することになりました。私の家も強制的に立退きをさせられ、戦車で家を壊わしていったそうです。強制疎開させられる時、親類の人達は、城山公園の西側で薬局を営んでいた叔父の家の庭に地下室をつくり、田舎に運べない家具等を納め、そこでしばらく共同生活を送ることになりました。

私は、ひとり母の祖父母の住む静岡で、母方の従兄弟と一緒に生活することになり、両親に連れられて東海道線の菊川という駅で降りました。父は大きなリュックサックを、母は大きな風呂敷づつみを背負い、凍てつき北風の吹く冬の夜、どの家も戸を閉ざして真暗な道も黙々と歩きます。空に星が青白く光り、寒さでかじかんだ手に、父がくれたピーナツを飴で固めた板状のお菓子を口にした時の、なんともいえない香ばしさと美味しさが今も鮮やかに蘇ります。どれ位歩いて祖父母の家に着いたかは覚えていませんが、数年前、伯父の葬儀に出かけた折はバスで二〇分程かかりました。

祖父母の家での生活は、両親との別れの淋しさも戦争の匂いもなく、裏山や川、海で遊んだ楽しい思い出と、乾燥イモのおやつ、土と日向のにおいをなつかしく思います。

その後、父が傷ついて除隊したのを機に、私は父方の伯母が住む長野県茅野市へ引越し、約一年振りに両親と一緒になりました。

茅野の家は、元旅館を営んでおりましたので、かなりの広さでしたが、八帖に一世帯づつ四世帯の共同生活でした。親類は私の家だけで、他の三家族の人達は東京で焼け出された見ず知らずの人でした。

茅野での生活は、家族一緒といっても、父は東京の店や叔父の家を守るということで月のほとんどが東京でした。母は世話になっている伯母の家が農家でしたから、田畑の仕事を私を連れて毎日手伝っていました。親類の家でもあり、野良仕事の手伝いもしていたので、毎日の食物にはあまり不自由な思いはしませんでした。とはいっても、ご飯は米と麦が半々、おかずは漬物主体。時にはさつまいもや、もろこしだけということもありました。釣ってきた川魚を煮たり、いなごをつくだ煮にしたりしておかずにしました。おやつは、かぼちゃやひまわりの種、なつめ、すぐり、くわの実、くるみなど自然の果実でした。

共同生活をしていた他の三家族は、野良仕事は不慣れなので手伝いもできず、食物との交換で次々に家具や洋服がなくなっていき、かなり悲惨な生活だったようです。私達が畑へ行って

いる間に、母の着物や貴金属が盗られることが度々ありました。母はやがて、馴れない野良仕事の疲れと隣人への気遣いから入院してしまいました。そんな気まずい生活が、私が小学校へ入学する昭和二二年まで続きました。

いつ、どこで終戦を迎えたのかはっきり覚えていません。茅野に移り住んで数か月後、家の白壁が飛行機からよく見えるので標的になるということから、カムフラージュするために黒く塗られていたのを、伯父や従兄弟達が「もう心配ない」といって白く塗りなおしているのをおぼえていますが、その頃がきっと終戦だったのでしょう。

昭和二六年夏、私達家族は中野に戻ってきました。この年が我が家にとっての終戦記念日です。戦前に遊んだ城山公園には都営住宅のバラックがびっしりと建っていました。私達が住んでいたところも親類が住んでいたところも、見知らぬ人の家が建っていました。

戦争は、戦場と化した国だけ、戦死した人とその家族だけが犠牲者ではないのです。私の家を中心に見渡しても、土地や家を失くし、父は戦中戦後と守っていた店を辞めさせられて職を失い、母は戦時中にこわした身体が亡くなるまで元に戻りませんでした。戦前に町内で一緒に生活していた親類も同様です。

直接戦争に係わりのない一般市民、善良な人々が、戦中戦後の混乱期には理性を失い、倫理を失った行為をした事が事実としてたくさんあります。人の心をなくし、一方では最大の地球破壊行為である戦争。もう二度とこのような愚かなことは阻止しなくてはと思いながら、幼い日の想い出が詰まる写真帳を閉じました。